

# 自然保育推進事業 活動報告書

## 1 かえで幼稚園

## 2 今年度の活動概要

### (1) 環境構成に関すること

当園は小さな森に隣接しており、子どもたちがそこで遊ぶこともできるようになっている。森での遊び方は様々で、走り回ること Alternatively、葉っぱや木の実、あるいは季節によってはどんぐりや栗など食べられるものを収穫して調理を施すこともある。

当園における森の活用として、遊びの時間であれば基本的に出入りを自由としている。またクラス活動として森の中に担任とともに入り、遊んだり絵本を読んだりなどの活動をすることもある。そして今年度は、こうした活動をさらに充実させ、森での遊びをさらに良くしていくことはできないだろうか、という問題に取り組んだ。

取り組みが進むにあたってまず気づかされたことは、遊びをさらに良くするということと自然という概念は、場合によっては相反しかねないということである。この取り組みにおいて当初考えていたことは、森をさらに魅力的なものにしていくにはどのように森を変えていくべきだろうか、ということである。森に新たな道を通したり、遊具を導入したりすることでさらに子どもたちが遊ぶのではないかと考えていた。しかし次第にわかってきたことは、子どもたちが自然の中で、何も飾らず、まさに「自然に」遊んでいるのを妨げるような取り組みをしてしまえば本末転倒となるのである。森での遊びをさらに良くしていくことはもちろん重要であるが、だからといって必要以上に手を加えすぎると「自然」を活用するという趣旨から外れていってしまう。自然が自然でなくなってしまうからだ。したがって第一になすべきことは、自然が自然であることを重んじて理解することとわかった。



### (2) 職員の資質向上の取組

今年度も自然体験活動アドバイザーである菊間馨先生を招いた研修を行い、園庭や森を一周しながら現在の園の環境を丁寧に見ていくこととした。まず環境を知ることが大切だという先生のアドバイスを受けて、参加者である教職員が森を歩いて気づいたことをメモしていった。これが大変有益な取り組みであり、各自の気づき

を共有し、自然で遊ぶヒントをたくさん得ることができた。

この研修によって学び感じ取ることができたのは、一つ一つの動植物の魅力である。あえて手を加えることをしなくても、自然は自然のままに十二分に遊びの環境であるということを職員間で共通理解としてもつことができた。



今年度は森を理解することに主眼をおいて取り組みを進めたが、来年度以降は子どもたちにもっと森に親んでもらうためにはどう働きかけるべきかということを取り組みとする予定である。子どもたちの中にも森が好きな子と苦手な子があり、虫取りが好きな子たちは一日中走り回っているのだが、苦手な子は担任と一緒にいくときでないかぎり一歩も入らないという様子

である。しかし森は遊びの場としてとても魅力的であるため、できるだけ多くの子に森に親んでもらいたいと考えている。

### (3) 遊びの事例

その他、今年度は自然の活用の検討を道具の面から進めていく取り組みも行った。その一つが砂場できめ細やかな砂を作るための「ふるい」の検討である。これまで当園では一般的な金属のふるいのみを利用していましたが、職員の経験や他園の実践から学ぶことで、マットをふるいのように用いるやり方を考え、子どもたちに紹介した。これは従来のふるいより扱いが少々難しいのだが、特に年長児は、これまで2年間使ってきたふるいよりもさらにきめ細かい砂ができるということに気づき、せっせとそれを利用し、これまでにない新たな遊びを展開している姿もあった。これは道具を改良したことで子どもたちは自然物である砂をさらに鋭敏な感覚によって捉えることができるようになった事例といえる。



人間と自然の間を取り持つのは道具である。自然が子どもたちを発達させ、彼らの感性を研ぎ澄ませていく力を持つとするならば、それは道具によるところも大きいと言えよう。自然体験活動をさらに優れたものにしていくために、当園では道具

の検討を更に進めていく予定である。